

## 新聞時評



文化活動団体代表  
「熟塾」原田 彰子

8月6日がやってくる。

広島、そして長崎に世界で初めて原子爆弾が投下されて60年の暑い夏だ。

紙面では△戦後60年の原点▽シリーズの一つとして4～6月に△沖縄・1945年▽が連載され、7月からは△広島・長崎 1945 年▽が始まる。

た。その日その日の話が読み切りで、掲載日に基づいて60年前の戦況を中心に、人々の暮らしぶりや、日記につづられた思いが丹念に記録されている。臨場感ある写真からは、当時の日本の空気を感ずることができ

## 問われる歴史観

さらに、4月に5回シリーズで掲載された△消えゆく声を追って ヒロシマ被爆60年▽は出色だった。最

近くなられた被爆者の生き様が紹介され、最終回の4月24日朝刊△孫に響く祖父母の思い▽は、「死者の

声は、時の流れとともに埋もれ行く運命にあるのかもしれない。それでも、悲観的なことばかりではない。私が、『継承』の軌跡をたどれたように。記者として、

次世代を担う一人として、埋もれ行く記憶に息を吹き込むことが大切な仕事だと、自覚できたのだから」

と、記者の思いで締めくくられていた。

新聞は今を伝えるだけではなく、過去の膨大な記事や写真の蓄積も踏まえ、消え行く戦争体験を次の世代に伝える語り部として、より期待されるものと、改めて思う。

戦争体験者から直接話を聞くことの大切さは、私が文化団体「熟塾」を旗揚げして5年目の00年8月、脚本家・早坂暁氏を大阪に迎えて、代表作の「夢千代日

記」に託した広島原爆への思いを聞き、自主上映映画「夏少女」の鑑賞会を開いた時に痛感した。

終戦から60年がたって、小泉首相の靖国参拝問題や政府による新しい追悼施設建設の是非が問われているが、今問われるべきは、日本人一人一人の歴史認識かもしれない。

今年6月には直木賞作家・難波利三氏の講演会を「熟塾」で開き、著書「大阪希望館」について語っていた。大阪も度重なる空襲を受け、多くの人が死

傷した。その著書では、終戦後、現在のJR大阪駅のガード下に家や家族をなくした人たちの一時保護所があり、食料難で餓死する子供がいたことや、苦しい生活でも、平和な時代に希望を寄せて生きようとする人間模様が描かれていた。

## 体験者の声を

戦後生まれの私は、60年前の大阪のことを余りにも知らな過ぎる……。深い自戒の念も込め、今年の8

月6日、大阪空襲に詳しい小山仁示・関西大学名誉教授の案内で大阪国際平和センターを見学し、終戦前

日の8月14日に京橋で1人爆弾の犠牲になった人々の慰霊碑を訪れ、犠牲者を追悼し、戦争体験を聞く会を開くことにした。

人類を、平和につなぎとめる大きなくさびとして、広島や長崎のことは忘れてはならないが、一人一人が、「自分の住んでいる町で60年前に何があったのか」と身近な戦争体験者の声に耳を傾け、そして、街角にある慰霊碑に手を合わせることも大切だ。

## 「戦中戦後史」検証、地域面でも続けて

だ。

地方分権の時代に向け、新聞の地域面の役割が重視される。埋もれているそれぞれの地元の戦中戦後史を検証し、今を生きている人々に発信していくことが、地域密着の新聞の責務として、ますます期待されるものと思う。地域面でも記者の「目」で、犠牲者の思いと共に、平和の大切さを語り続けてもらいたい。

この論評は大阪本社発行の紙面をもとにしました。